

里井彦七郎 著

『近代中国における  
民衆運動とその思想』

東京大学出版会 1972年 419ページ

## I

従来、中国の歴史に関する業績には三つの山があった。一つは明末清初の研究、第2には辛亥革命を中心とする研究、そして第3に1949年の新中国誕生を境とする研究である。それぞれの時期が、中国の歴史が大きく変化した決定的な時点であったから、そこに研究が集中したことは当然のことである。そしてその変化が決定的であればあるほど、その基礎的要因が個別的な枠を超え、歴史的な広がりをもって究明されることもまた当然である。現在は、比較的手薄であったその中間の時代、清代および民国の研究が新しい動向として定着しつつあるように見うける。「新しい」というのは、特に民国時代の研究に顕著であるが、この時期の研究が単に個別的研究にとどまるのではなく、先の三つの時点の研究諸成果に関連させてどう位置づけるのかという問題が、視野の中に設置されていることである。自らの個別研究が、中国の歴史の流れの中でどういう意味をもつか、という問題であるといってもよいであろう。こうした動向が評価されるのは、従来の研究が次のような状態にあったからである。「中国近代史(アヘン戦争～1949年の中華人民共和国成立まで)の諸研究は、とくに戦後精密化され、アヘン戦争、太平天国、洋務運動、捻軍、変法運動、義和団、辛亥革命、五・四運動、大革命、ソヴェト革命、抗日戦争等々の個別問題は、かなり詳細に研究されるようになった。そのこと自体は、意義のあることであり、事実、問題別には、かなりの研究成果をあげている。しかし、これらの諸研究は、まだ孤立分散的な個別研究性を克服しておらず、中国近代史の全発展過程を体系的・包括的にとらえなおす方法論上の諸問題と研究上の諸課題は今後一層意識的に明確にされねばならないと思われる。」(1ページ)。

本書は、17・8世紀の銅・鉛・錫生産から五・四運動へかけての思想の問題まで、里井氏の世紀にわたる視野と幅広い関心を示す、きわめて規模の大きな研究書である。第一章：資本主義萌芽問題研究(清代の銅・鉛鋅業

の問題)、第二章：19世紀の仇教運動、第三章：義和団運動、第四章：知識人評価(辛亥革命前夜～五・四運動期)というように、歴史の進展につれて各章が配置される形になっているけれども、そこに扱われている課題はまことに多様である。察するにこうした構成(ないし氏の研究)は、個別研究の孤立分散的な状況を克服する意図のもとになされていると考えてよいであろう。そうであれば、この多様な課題の中に、本書を一貫する歴史の流れを読みとっていかなければならない。少なくとも、個々の課題を限ってそのみを詳評することは、避けなければならないであろう。

恐らくこの歴史の流れとは、次のような思想の問題として提起されよう。不合理な社会の矛盾を主体的に担い、殊酷な歴史の中に志を半ばに倒れていった、大多数が名もなき人びとの、思想の継承の問題であると。本書がこの問題にどこまで応えているかは別として、思想に関する個別の研究成果も少ないという現状のうえに、こうした問題に接近するためには、中国の歴史全体にかかわる視野の広さと、それと同時に1人1人の人間へのあくことない関心を兼ねそなえていなければならない、という本書の性格がまず念頭におかれなければならない。この関連で注目しなければならないのは、第二章、第三章にわたる仇教運動である。本来ならば本書の最終的な評価は、第四章の個人の思想を問題にするところで決定される。しかし氏も述べられているように、この章は、「経済的な基礎過程や当時の大衆運動そのものとの関係はあまり深く追求されず、その意味で、陳・李個人の政治的・思想的発展過程の究明に力点がおかれているという方法論上の欠点をもっている。また、陳も李も初期の活動と思想のみにふれ、その後の諸問題については論及していない」(24ページ)という問題を残す。今後の成果を楽しみにすることにして、ここでは必要な限りで触れるにとどめるべきであると考ええる。

## II

本書において「民衆運動の思想」として述べられているのは、「(中国の各発展段階を通じて)人民各階層がどのように古い思想を克服し新しい思想を身につけて、反帝・反封建闘争の主体性を積極的に確立していったか」(19ページ)という意味である。19世紀後半の仇教運動の思想、20世紀初頭の義和団運動の思想が本書の中心的なテーマになると考えられるので、最初に第二章の仇教運動と哥老会の関連を問題にしよう。

アヘン戦争以降の列強の進出を背景として、1724年以來国禁となっていたキリスト教会勢力の積極的な中国進出が再開されるが、中国側でこの信仰を迎え入れたのは、官僚支配体制の重圧を受ける、貧苦にあえぐ民衆であった。彼らは権力の強制に抗するために、教会の勢力に頼らざるをえなかったのであるが、教会の方でも積極的にその対立に介入し、教民を擁護することによって信者を増やしていった。ところで、教会および教民のこうした行動は、次のような社会情勢のもとでとられたものである。「73年、太平天国に引きつづいた諸反乱は洋務運動を主力とした清軍に討伐されていたが、他の東南諸地方と同じように、安徽省東南部地帯でも農村は荒れ果て、労働人口は激減し、『人稀土曠』という状態だったため、地主たちは河南省や湖北北省から流出してきた移作農民（＝客民）を雇うことによって地主制を維持しなければならなかった。かくて、地主と土着農民・客民との対抗関係とならんで、土着民対客民、客民対客民の矛盾も存在し、地主や官僚にとって、まことに不安定な状況を呈していた」（170ページ）。そこに新しい要素として教会勢力が浸透してきたために、民族内部の矛盾は激化し、列強進出に伴って生じた官僚集団内部の対立とも結びついて、教民と非教民との間で「血で血を洗う闘い」がくりひろげられることになる。

この民族的内部矛盾の爆発の中に、次第に「哥老会」が中心的な位置を占め、運動を指導することになる。四川に発生し各地に広がったこの哥老会は、最初は貧民の相互扶助的団体にすぎなかったものが、太平天国後、さまざまな社会の最下層の人びと、失業兵士、運輸交通労働者、塩の密売者、土地を失った農民、都市の貧民などを中核とした秘密結社として、「かなり広汎な階層を包含しつつ、清朝中央や地方の督撫を怖れしむる巨大な政治団体に成長した」ものであり、当時すでに「反清・反官をめざす政治勢力に発展していた」（172～174ページ）。すなわち、氏が思想の問題として提起される反帝・反封建闘争は、すでに反清・反官運動を展開していた哥老会が、反帝の性格をもった仇教運動の中心に立つことによってはじめて統一的・主体的に運動の中に定着することになる。氏の言によれば、「民衆のそれは、そのままでは結実しなかったけれども、反帝・反封建の闘争を統一しようという民族的課題をにないつつ、それ故、20世紀以降に大きい歴史的課題を投げかける闘いにほかならなかった」（200ページ）のである。

ところで、哥老会の果たしたこの役割が、歴史的な必

然性をもつものであったかどうかは、上述の運動過程のみからは確定しえない。当時の社会構成との関連が問われる必要があり、銅・鉛・鋅業を中心に展開される、第一章「資本主義萌芽」の問題に戻ることにしよう。

いわゆる「資本主義萌芽論争」は、清末および民初以降の民族ブルジョアジーの性格規定とその系譜を求めて、織物業、塩業、陶業、鋳業などが小商品生産として発達した明末清初にまでさかのぼった論争である。当時の小商品生産の発展が中国における資本主義的生産様式の成立とどう関連するのかという問題であり、日中両国の歴史学会において、継起的発展をとる見解と否定する見解とで論争のあるところである。本章は本来、この問題の解明が、18世紀までで打ち切られてしまっている現状を克服する目的で執筆されたことに注意する必要がある。この問題自体は大変興味ある課題であり、たとえば、「これはまだ一つの推定ないし見通し」であるとの前提のもとに、「砂戸人・炉戸の企業は、その周辺に多量の単純小商品生産をめぐらせつつ、マニユファクチュア企業として発展しつつあったのではないか」（116ページ。傍点引用者）という見解をだしておられる。「発展しつつあった」というのは、同一の企業において、封建的な清朝権力の浸透している側面と、マニユとして発展しつつある側面との矛盾の統一として、当時の鋳業をとらえるということである。このすぐれた構想には評者も教えられるところが多いのであるが、本書での問題はここにとどまらない。

こうして発展しつつあった民営のマニユ企業は、銅銭の材料である銅・鉛・錫の確保にせまられた（明代中期清代初期以降の商品・貨幣経済の発達により、膨大な官僚体制、軍隊・警察機構を維持するうえで、どうしても銅銭を必要とした）清朝の経済外的強権によって、官営マニユ企業へ反動的に再編成されてしまう。こうした反動化は、鋳業のみならず18世紀に一般的な趨勢であり、ギルドの再編強化による規制を通じて、小商品生産のそれ以上の発展はおしとどめられてしまう。このような当時の社会構成にマニユ発展の契機があったかどうか、マニユ成立か否かの基本的な問題であるとするれば、本書の課題からいえば、この再編成の過程で叩きつぶされてしまう側の、小商品生産者層の状況が問題になってくる。すなわち、「各種鋳業労働者による太平天国や雲南国民起義への発展を示そうとした」（27ページ）という問題である。「国家権力の強力かつ直接的な保護の下に独立自営の小企業を叩きつぶすことを通じて生産の増大・集中

を計った官営企業もまた、(清朝の強制的な低価格の購入により縮小再生産の途に追いこまれ)その成立の当初から衰退のコースを歩まざるをえなかった」(134ページ)。とすれば、これは、いわゆるルンペンプロレタリアート形成の過程でもあったのである。ここから秘密結社形成の歴史的必然性が導きだされてくるが、その理論的側面については、本書で明確に触れられていない点にもおよびるので、それを補いつつ整理しておくことにしよう。

氏の「半原蓄過程」ないし「半プロ層」は以下のように規定される。「中国では、生産手段を剝奪された多数の直接生産者大衆のプロレタリアートへの転化もきわめて部分的にしか進行せず、その圧倒的多数が失業者群として農村や都市に放出されざるをえなかった」のであり、「この未成熟な半原蓄過程こそ、各種の秘密結社を、とくに長江中・下流域の各都市に再生産した必然的な過程であり、同時に、これら秘密結社が人民の反植民地主義・反洋務派闘争を指導した必然的な過程でもあった」(204ページ)。民衆運動の台頭にせまる重要な指摘である。しかし、この「半原蓄過程」が普遍的なものとして歴史的発展の中に位置づけられるためには、次の中国に特殊な事情が前提とされなければならない。中国の社会構成の発展段階は、20世紀においても資本主義的生産様式はウクライドにとどまり、小商品生産がなお主流を占めていた。現象的には段階を画する顕著な発展はなかったのであるが、内在的には、これらの広範な小商品生産はウクライドとしての資本主義的生産様式に結びついて、世界史的な再生産構造の一環に組み込まれつつあったのである。とすれば、社会構成発展の指標としては、総過程としての再生産構造の質的な展開をとりあげるものでなければならないことになる。いいかえるなら、この質的転化が問題になるという意味で、小商品生産からマニユ生産への発展の契機が封建諸勢力の強権によって押さえられ、地主制の枠内で階級的矛盾の激化として現象してくる過程を明らかにすることが必要になる。これが、広範に形成される民衆運動に歴史的な必然性があつたと考えざるをえない、理論的な帰結なのである。以上の問題に関して、本書には次のような指摘がある。「この時期(1840～43年)の植民地化の危機と封建体制の危機とを、単に直接的生産者の再生産過程(世界史的な市場構造問題をふくめて)における大変動だけでなく——そのこと自体改めて再検討されるべきだが——、支配階級そのものの危機を、領主制が成立せず、アジア的な専制君主=官僚支配として成立したそのアジア的・中国的な体制の危機と

してとらえ直してみる必要がある、その視点から、当時の歴史的諸条件の下で、中国的な原蓄過程と、そこから必然的に立ちあらわれてくる半プロ層の形成と役割、没落地主層の歴史性や人民闘争指導の実態を考え直す」(15ページ)必要がある、と。民衆運動を重視しなければならないことには、いささかの異論もないのであるが、その歴史的形成過程の解明と、総過程としての再生産構造の解明が、ここに見るように当面切り離されて設定されており、そのため「半原蓄過程」、ないしそれを進展させる階級矛盾の深化が具体的に(歴史的規定性をもって)明らかにされていない。「半プロ層」による闘争は、その背後の、失業者群を生み出す階級的矛盾の激化を示唆するものであり、そこに位置づけてはじめて、発展段階を規定する歴史的な意味をもってくるのである。

以上の理論的な前提を置いたうえで、本書にいう近代史発展の第2段階(1874～94年)に対する次のような指摘は、基本的に承認されるべきであると考えられる(1895年以降については評者は異なる見解をもつ。これについては後述)。「華中(長江中・下流域)ではイギリスの独占的支配とそれに隷属した買弁的官僚ブルジョアジーの支配が深まり、半原蓄過程が鋭く進行、そこでの人民諸闘争の指導権が没落中小地主層から半プロ層へ移行したのではないか」(17ページ)。これに賛成したいのは、綿糸輸入の動向に現われているように、この時期列強は、アヘンや綿布などの輸入によって在来の再生産構造を破壊しつつ進出する形から、小農民経営を世界市場に再編成する方向への転換を開始する。その影響がまだ一般的でない一方、国内ブルジョアジーも未成熟なままに、再生産過程から引きはなされているという意味での「半プロ層」が、この時期の階級的矛盾の主要な手という歴史的な意味をもったと考えられるからである。

それゆえ第一章と第二章の接点において、次のようなことが、一般的な問題として提起できるのではなかろうか。先の課題に戻れば、鉦業生産に従事した労働者は、もともと「無頼の徒」とよばれた無業のりびとであった。広範な小商品生産者たちが国内市場に保障されて育ちつつあったが、それが叩きつぶされて再び「無頼の徒」に戻ったところで、問題になるのはこのりびとの運命についてである。清朝権力に抗してマニユへの展望をもったという、不合理な権力に対する一時的・個別的な抵抗の姿勢は、たとえ依拠する場が叩きつぶされ、流浪に身をまかせなければならなくなったとしても、それらのりびとの経験の中に取り入れられ蓄積されて、秘かに後世に

伝えられていったと考えられないか。先にみたように、以上に「半プロ層」と規定された人びとは、哥老会に結集しつつ反帝・反封建の闘争に立ちあがるが、これが、本書を評して提示した「思想の継承」の問題である。

第一章、第二章とも、仇教運動と土俗的思想の関連、四川の「順清滅洋」のスローガンの解釈など、個々についてはなおいくつか検討すべき問題を残すようである。だがここでは問題をしばって、19世紀仇教運動の思想が、義和団運動に再び姿を現わす仇教運動の中でどのように定着し結実していったかを見ることにしよう。

### III

この過程を氏は、運動自体の発展の側面と、思想的発展とを関連させつつ展開されるが、前者は本書に未収録の「義和団運動」（岩波講座『世界歴史』第22巻）で論じられており、ここでは主として、そこで扱えなかった思想的側面が中心となる。

まず問題になるのは、先の仇教運動からの系譜であろう。19世紀の仇教運動という民族的矛盾を生みだした列強の進出は、その後も質的転化をとげつつ強められており、したがって義和団運動の生成と発展は、その当初より全国的な民衆の反帝闘争が、展開される中で行なわれる。義和団初期の代表的思想は「仇教」であり、それも「個々の教会勢力に対する敵対認識であって、総体としての教会＝帝国主義認識は形成されていなかった」（217ページ）という。とすると、19世紀仇教運動の鉾先が、「教会勢力だけでなく、列強資本主義（この場合とくに、長江中・下流地帯に深く進出してきたイギリス資本主義）を、より一層明瞭に象徴する人間（税関員）や建造物（税関・領事館）にも向けられていた」（177ページ）ことに比較し、義和団はかなり後退したところから出発したことになる。客観的情勢としては、19世紀仇教運動の発展が保障されていたにもかかわらず、歴史の実際においてこうした断絶が起こったのは、運動の中心が華北に移ったことによるものであろう。この経緯について、氏は次のように語っておられる。「この地域が伝統的に民乱の盛んな地域であったほか、長江下流地帯に、帝国主義侵略の民族的矛盾や買弁的官僚ブルジョアジーによる国内階級的矛盾が激化しながら、帝国主義支配の拠点であり、洋務派支配の中心地でもあったために、大規模な反帝・反封建闘争の激発が暴力的に抑えられ、その民衆の反帝・反封建エネルギーが、五省の境界が錯綜しており、帝国

主義や国内権力のいわば弱い環であったこの地域に凝集した」（216ページ。傍点引用者）。

詳しく論ずる余裕はないが、この発言に関し若干の疑問を述べておきたい。華中と華北のこの地域差は、この時期、長江中・下流の社会構成が部分的にはあらずに、帝国主義を中心とする世界史的な再生産過程に組み込まれていたことを示すと考えられないか。この再生産過程の中国への浸透は、帝国主義的世界体制の成立という、19世紀から20世紀への世界史的発展段階の質的転化の内容をなす。これに伴って階級的矛盾の現われ方も変化せざるをえないのであり、当然失業者群としての「半プロ層」の再評価、副業を含む小農経営の解体とその世界史的な再編成、およびそこから生ずる矛盾を克服しようとする民衆運動の地域的・質的相違などの再検討が必要となる。氏は、初期プロレタリアートや半プロ層の以上の意味での再検討を、1902年以降におかれる（18ページ）。そのこと自体はおおいに賛成なのであるが、それ以前の時期においても特定の地域においては、初発の形態としてのこれらの課題の究明が必要であろう。長江下流地帯が先進地であったとみなされるゆえんであり、単に暴力的に民衆運動が抑圧されたとするのは一面的なのではなからうか。華北の発展段階の究明が進められる必要があるけれども、義和団運動は、以上の質的転化の過渡期に位置づけて、評価しなければならぬと思われる。また本書では、華中の仇教運動との歴史的な関連に関し、運動の側面については上述の指摘がなされているが、思想面での問題の展開はない。一般に義和団運動は1898年から開始するとされており、氏が1895年から大刀会の運動に着目されることにも関連し、初期の思想における華中仇教運動からの継承、あるいは独自性が問題点の一つとして究明される必要があるといえよう。

19世紀仇教運動の到達した思想が現われるのは、本書で仇教運動の第三期（1900年5月～8月）とされている時期のことである。この時期に問題とされるのは、「扶清滅洋」という綱領で表現された「反帝闘争と反帝民族戦線のより本格的な展開」であり、したがってそれと対比される、義和団運動の最初から最後までを濃く色どった、土俗的・宗教的信仰についてである。義和団の思想のこの側面について、氏は次のように重要な指摘をしておられる。(1)真命天子その他、玉皇帝、闕帝等々の神、風水説、菩薩・鬼神信仰などの非合理的・落後的側面があったが、「このような落後的側面を全面的に否定してはならないと思う。むしろ彼らがどのようにしてその側面

を克服しようと闘ったかをさぐるべきであろう」(250～251ページ)。(2)民衆思想が、儒教、道教、土俗・民族思想、菩薩信仰、日常的・庶民的な戒律など非画一的・多様的であって、「民衆が支配階級のイデオロギー(儒教)の影響からの脱出の途をさぐっていた。その過程にあったことをみのがしてはならない」(253ページ)。(3)義和団大衆の思想は、支配階級のイデオロギーに深く影響されていた部分と、本来非支配階級的な庶民的部分との対立・抗争を内在させていた。それを矛盾としてとらえ、義和団大衆の思想が発展せざるをえない思想的根拠を追求する必要がある。(255ページ)。そしてさらに、(4)「その絶対的な神の力への帰依も、また、上述の帝国主義的侵略のさまざまな表象に反対する思想も、帝国主義と国内買弁的諸階級の支配にあえぐ民衆の、物質的・政治的・軍事的要求に裏づけられており、またそれらの切実な要求の実現をめざす闘いの思想でもあった」(284ページ)。

民衆運動の本質に触れ、それをえぐり出すにまことに見事である。土俗的民衆思想のこうした評価は、第一章以来注目してきた氏の柔軟な姿勢の現われに他ならない。ただここで、この後の論理の展開に関連して問題にしておきたい点が二、三ある。上述の民衆思想を、義和団の思想の発展にかかわらせて積極的側面と否定的側面にわけ、後者の克服という形で問題を出されている点についてである。すなわち、運動の第一期(1895年～1897年秋頃)については、こうした信仰は、「農民たちの日常生活と精神構造のなかに生きつづけてきた」として、「彼らの宗教的信仰、民衆的英雄や反権力への素朴な讃美の精神が偉大な働きをし、発生期義和団の闘いと結集をささえた側面を度外視してはならない」(222～223ページ。傍点引用者)とされているが、第三期になると、「個々の義和団がなお神や絶対者への信仰に固執していたとしても、(半プロ層の指導を深部の力とした反帝・反買弁の民族戦線形成の過程がこれを可能にしたのである)国軍の一部が優秀な武器をもって義和団の指導の下に闘ったことを忘れてはなるまい。例示した個々の局面における、宗教性の克服の過程は、そのような全体の一部分を構成したと考える」(291ページ)というように、この信仰が、克服すべき落後的側面としてとらえられる。義和団中心に議論が展開されているという印象をまぬがれないのであって、たとえば「風水思想」は、単に落後的・非合理的思想としてあったのではなく、「風には風の道があり、水には水の道がある」という農民の生きる姿勢なり思想としての意味をもっていた。かつ、

大躍進後のことであるが、無計画な治水灌漑への反省として、「水は低きに流れるのが自然である」という形でもう一度この思想が、復活することにもうかがえるように、農村の生活に密接に結びついた、生きた思想なのである。また神農信仰などは、それ自体が反官精神に貫かれた思想であるとともに、葉の神様として信仰された、これもまた農民の密着した思想なのである(大島利一「神農と農家者流」、『東洋史論叢』昭和25年11月)。

この土俗的思想の受けとり方は、義和団運動の性格規定、あるいは「半プロ層」と農民の交流の問題と関連して、かなり重要な意味をもつ。たとえば、義和団運動の一過程においては、「明確な形で直接的に資本主義的諸事実、諸機関、諸人物、諸制度への対立認識を持つようになったのは、1900年5、6月以降、義和団が天津や北京などの華北最大の都会に進出してからのことであった」(276ページ)ということがあり、確かに運動の発展は、また義和団が視野を飛躍的に開きつつある過程でもあった。だがそれが運動発展の一側面でしかないことは、中国における主要な矛盾の深化が農村で進行したという、中国の革命が農村から都市を包囲した歴史的事実に明らかである。こうして開かれた視野が再び農村に持ち帰られ、新たな形で生かされる問題こそ、20世紀民衆運動の主要な課題となる。いうまでもなく当時であっても、「半植民地・半封建制」の深化と民衆思想発展の場はあくまで農村にあったのである。また確かに、民衆思想そのものは指導層の思想によって先進的にも、反動的にも、容易に変わりうる面をもつ。指導層の思想とのかかわりが問題になるゆえんである。しかし、そのあり方は一方的なものとは決して考えられない。思想に限って問題にすれば、「義和拳」という、「この拳を学べば、弾もよけて通る」という信仰、当時の農民にとっては救いともいえるべき信仰が義和団から提出されれば、農民の方からは、彼ら独自の「天命思想」、「風水思想」などをもって応えたのではないだろうか。たとえその信仰が、運動の過程で義和団の組織性なり、計画性なりに対する信頼に変わるうとも、思想のもつ個別性と普遍性のこの性格は変わらないであろう。

#### IV

さて、仇教運動のもう一つの側面は、異質の文化の浸透と従来からの文化の対立であったと見ることができよう。本書に、「きびしい家父長制に反抗して入教したある男は、母親を含む一族の長老たちに拷打されて死んだ」

(I46ページ)と例示されているように、それは、大きくは外部からの文化と中国独自の文化との対立であり、しかも具体的にはきわめて個人的なかかわり方での対立なのである。さらに、外部からの文化が近代的な性格をもつならば、後者のある面で封建的な性格は強められる可能性もある、悲惨な対立でもあったことが留意されなければならない。今まで見てきたように、信仰なり思想なりという問題は、究極において、社会的経済的基礎過程に深く規定される。したがってこの文化の対立は、民族的矛盾たる仇教運動として、社会の底辺にあって階級的矛盾を正面からになわざるをえない、いわば限界的な層にある人びとによって最も熾烈に争われた。第三章まではこうした意味での仇教運動の思想が問題とされていた。さらにここで問題となってくるのが、仇教そのものを個別のかつ普遍的な思想としてとらえる視点である。逆にいえば、かかる思想の二重の性格こそ、その矛盾した性格を止揚するために、上述の「文化」という概念が必要とされるのである。思想が現実化されるためには、すなわち個別の思想が同時に普遍性をもつためには、そこに個々の文化が前提とされなければならない。個別の新たな思想は新しい運動によって現実化されるが、その運動は同時に、新たな文化の創造を伴うものでなければならないのである。あるいは、この文化の創造とは、思想の二重性を止揚する文化の固有の意味(=階級性)が、絶えず問い直される過程であるといってもよいであろう。ここで初めて、先のある面で膠着した文化の対立が流動化する可能性を生ずるのである。

本書にいう「民族戦線形成」とは、この文化的対立が、民族的課題として反帝闘争に止揚される過程を指すと考えられるが、なお以上の「文化」という概念に関連して、第三章までの本書については、次の2点が欠点として指摘できるように思う。(1)土俗的民衆運動について問題にしたように、「運動の思想」に重点がおかれ、個別的思想との弁証法的な関係が相対的に軽視される。すなわち、思想の二重性の問題が見落とされている。(2)民衆運動の思想が現実化されるためには、それを保障する新しい文化の創造が必要である。本書にいう「思想」にこの「文化」が含まれているのかどうかがあいまいであり、そのため運動と思想の結びつく客観的な条件が不明確である。第四章ではしたがって、この2点を克服すべく、個人の思想の問題が提起されてくることになる。陳天華にしても李大釗にしても、その生涯は、仇教運動や義和団運動の成果を含む過去の文化を批判的に継承し、さらに新しい文化を創りあげるための苦闘に捧げられる。陳

天華は1905年12月8日、留日学生弾圧事件に抗議して大森海岸に投身自殺し、李大釗はこれを取りあげて、「原殺一時殺と自殺」(『言治月刊』1913年9月)を発表するにいたる。ところで、これは魅力的なテーマであるけれども、すでに紙数もつき、第一節で述べた事情もあるので、ここでは中国知識人の問題を考えるにあたって、評者自身の感じている疑問ないし反省を述べるにとどめることとしたい。

19世紀から20世紀への世界史的発展段階の質的転化の問題は、また当時の社会に次のような影響を与えたのではないだろうか。中国社会にあって、帝国主義から転嫁される矛盾をまともに担わざるをえなかった人びとにとっては、帝国主義との対決が自己の運命を左右するほどの問題であったにもかかわらず、1900年以降、その本質を正確に見極めることはきわめて困難なことになった。先にもみたように、19世紀仇教運動および義和団運動は、帝国主義に対する直接的な敵対認識に基づくものであったが、その義和団が弾圧されたところで本格的に開始された世界体制としての帝国主義の侵略は、直接的・具体的な姿で現われたわけではない。一般にこの時期の知識人の苦悩は、義和団が弾圧されたあとの、清朝(ないし袁政権)およびその背後の帝国主義的世界体制をいかに把握しなおすか、いかに視野を広げるかという問題に基本的に関連していたのではないだろうか。さらにいえば、以上の問題は、反満・反帝運動を組織した留学生の思想をも深く規定し、留学という異質の社会と直面した、いわば限界的なあり方と深くかかわっていたのではないかと考えているところである。

思想が個別的・普遍的という二重の性格をもつものでありながら、従来この問題の扱われ方は、どちらか一方の側面のみが強調され、ドグマ的議論に陥っている場合が少なくない。氏の知識人評価が、過去の文化の批判的摂取という場面から始められているのは注目される点である。残された課題への今後の展開が期待される。

以上、評者の関心によって、やや強引に整理したきらいがないわけではない。個々については、なお触れてみたい残された興味ある問題(たとえば淡水仇教運動発展の歴史など)が少なくないのであるが、おそらくそれをたどれば、本書の違ふ貌がまた浮かびあがってくる。本書の規模の大きさを示すに他ならないであろう。里井氏の一層の御活躍を祈りつつ、筆を置くことにしよう。

(調査研究部 田近一浩)